

生活経験主義のカリキュラム開発に関する一考察

—コア・カリキュラムの編成をもとにして—

常磐大学人間科学部

森山賢一

概要

本研究はコア・カリキュラムの編成の具体案をもとに実際の経験カリキュラムがどのような内容として展開されたのか、さらにそれはどのような特徴をもっていたのかを中心に考察し、現代におけるカリキュラム開発の一助とすることを目的とした。

我が国における生活経験主義のカリキュラムであるコア・カリキュラムは、その編成のモデルをアメリカバージニア案やカリフォルニア案に求め、生活領域、児童の発達段階の2つの側面によって、単元を決定する特色を持っていた。また、重要な視点である生活カリキュラムと教科カリキュラムの関係については、生活カリキュラムが中核にすえられ、それと関連をもたせて教科カリキュラムが取扱われることが必要とされた。本論文においてはその実践例として「明石プラン」をとり上げ考察、吟味を行った。ここでは周到なその学校独自のプランが設定され中心学習と基礎学習によって精密なプランが開発された。

以上のことは現代カリキュラム開発にも大きな示唆を与えるものである。

キーワード：生活経験主義、カリキュラム編成、問題解決学習、カリキュラム開発

1. はじめに

我が国の学校教育では現在、カリキュラムの改革（カリキュラム開発）が盛んに行われている。

このカリキュラム開発の取り組みは、よりよい教育の実現化の中心的役割を担っており、まさに、現代教育改革の中心課題であるといえよう。

近年では、教科カリキュラムと経験カリキュラムが完全に区分されず統合の方向も見うけられる。また、2002（平成14）年より、小・中学校で全面实施されている「総合的な学習の時間」の導入によって学校全体のカリキュラムも大きく変化した。この「総合的な学習の時間」をめぐるには、さまざまな論議が沸き起こっており、教育課程における現代的課題の一つとしてあげられている。

ここでは、当然、単なる学習指導方法や学習内容の吟味といったレベルの検討、改善ではなく、学校に基礎を置くカリキュラム開発（school-based curriculum development）に基づいた検討、改善が緊急の課題である。「総合的な学習の時間」をカリキュラム上に位置づけるということは、これまでのカリキュラムの中に挿入するといった単なる付加的作業のみでは十分ではありえず、全体から多面的な考察、吟味が必要である。

このことは、各学校における実践の中でのカリキュラム開発が重要であることを意味している。このカリ

キュラム開発の重要性については、以下のように天野正輝によって端的に述べられている。

「教育改革の議論は、カリキュラムの研究・開発に集約され、焦点化されるという特徴をもつ。なぜなら、国家的レベルにせよ、各学校のレベルにせよ、一人一人の児童生徒のレベルにせよ、教育の理念はカリキュラムによって具体化され、現実化されるものだからである。」¹⁾

しかし、現在のカリキュラム開発やその実践についての試みは全て新しい取り組みというものではなく、これまでの教育の歴史を振り返ればさまざまな創意工夫されたカリキュラム開発や実践が存在する。特に、第2次世界大戦後の新教育期において展開されたコア・カリキュラムの展開は、我が国におけるカリキュラム開発の理論と実践に貴重な示唆を与えているものである。

1947（昭和22）年3月に文部省から我が国最初の『学校指導要領・一般編（試案）』が刊行され、「生活経験主義」が唱道され、そこでの教育の中心的目標は、「生活を営む力」の育成におかれた。ここでは、アメリカの経験主義教育の理論、とりわけデューイ（Dewey, John, 1859 - 1952）とキルパトリック（Kilpatrick, William, H., 1871 - 1965）の教育理論に影響を受け、子どもの自発性、興味・関心が重視された。

このことから、これまでの分化主義、教科教育方式からコア・カリキュラム、生活単元学習が全国に普及された。特に、コア・カリキュラムは戦後の大きな教育改革の一つである社会科の誕生を契機として、教科の枠にとらわれない総合的なカリキュラムとして急速に盛り上がったのである。

本研究においては、戦後の合科・総合学習の歴史的遺産の中で、画期的な展開として世の注目を浴びたコア・カリキュラム編成の具体案をもとに、実際の経験カリキュラムがどのような編成方法をたどり、どのような内容によって展開されたのか、そこにはどのような課題が残されたのかを中心に考察を深め、現代におけるカリキュラム開発の一助としたい。

2. コア・カリキュラムの概念と特質

コア・カリキュラムは、我が国において第二次世界大戦直後、アメリカをモデルとし、教科の枠にとらわれないでその中に「コア（核）」となるものを設定して全ての教育活動を総合的に学習するカリキュラムである。

当時、経験主義の教育課程が文部省より学習指導要領を通して推進されたが、各学校の対応は決して順調なものではなかった。このことは、これまで長い間、我が国の学校教育において各学校がカリキュラムの編成に取り組んでこなかったことも大きな要因であったといえる。²⁾ 当時解説書では、教育観および教育課程観の転換を、従来の教科カリキュラムと新しい経験カリキュラムの対比において、以下のように平易に示して³⁾ 教師の理解を求めたが、なかなか受け入れられなかった。

<教育観>

教科カリキュラム	経験カリキュラム
1. 教育は学校や 教室での営みである。	1. ひろい生活経験を 継続的・組織的に指導するにある。
2. 知識・技術からなる教材が 中心であってそれを教え込めば 自然に人間ができる。	2. 児童生徒の全人的な発達が 中心であって教材はそれを助成する 手段である。

3. 教育は知的な過程である	3. 知性を含めた全人的な過程である。
4. 将来の成人生活への準備が目的である。	4. 現在の生活を最高度に充実させる。
5. 教育は文化遺産の伝達である。	6. 現代の個人的・社会的な必要を満たすことであり、また生活の改善に有用意味を重んずる。
6. 教師の活動が中心であって、生徒は受け身である。	6. 問題解決の積極的な、児童生徒の活動が学習であり、教師はこれを指導助力する。
7. 生活を観照的に学習する。 客観主義。	7. 集団生活に参加するところに学習がある。行動主義。
8. 知識や技術をそれ自信として習得する。	8. 統合された生活経験の一部として、必要に即して学習する。
9. 画一的な教授である。	9. それぞれの事態に応じ、また、個性の暢達をめざす。
10. 固定され、細分された時間割と児童生徒の組分けや分団をもつ。	10. 弾力性のある学校の管理、組織を行う。
11. 個人主義的な成績競争。	11. 共同目的実現のための民主的な協力を学習するのが主眼である。

<教育課程観>

1. 教科と教材の組織である。	1. 経験と活動が体系である。
2. 知識や文化的道具が教材である。	2. あらゆる種類の経験が教材である。
3. 教材のありかは教科書である。	3. 学校生活や地域社会のどこにでも教材はある。
4. 知識や学科の体系にしたがって教材が分類されている。	4. 教材区はこわされ、生活の体系によって経験がまとめられる。
5. 内容は教科の論理性により、選択配列される。	5. 生徒の発達段階、学習心理を考慮する心理主義
6. 教科課程の管理は教師、その他教育当局の独裁により予定される。	6. 教師と児童生活の参加協力によって発展できる弾力性をもつ。
7. 教科課程は静的固定的である。	7. 社会の変化に応ずる。
8. 課外活動との間に明確な線をひく。	8. 学校生活のあらゆる機会が教育課程化される

このような状況の中で、梅根悟は、『新教育への道』（昭和22年）によって生活教育論を提唱し、さらに1948（昭和23）年にはコア・カリキュラム連盟（のちに日本生活教育連盟と改称）の結成によって生活経験主義教育の理論と実践に一定の指針を与えたのである。この連盟の委員長は石山修平で、この下に梅根悟、倉澤剛らが活動していた。いったいコア・カリキュラムとはどんなものであるか、倉澤剛の著書『カリキュラム構成』（昭和24年）によって以下みてみよう。⁴⁾

倉澤によれば、日本でも米国でもヨーロッパでも伝統的な教科中心のカリキュラムが長く続いたが、19世紀末から20世紀にかけて大きな転機が訪れた。米国では、1929（昭和4）年、未曾有の経済恐慌におそわれ、さしもの繁栄が全く影をひそめ、1930年代を通じて、かつてない社会混乱がおこる。米国国民と教育界は、それまでの教育に深い疑問をもち、社会的にもっと有力な学校を目指してカリキュラムの根本的な改造を企てることになる。即ち従来の教科カリキュラムから生活カリキュラムへの一大転機である。具体的

には社会の「民主化」の要素に基づき、カリキュラムの「生活化」を目指し、その結果カリキュラムの「総合化」「活動化」そして「個別化」の要求となってあらわれた。⁵⁾

カリキュラムの「民主化」とは、カリキュラムが一部知識人の形成ではなく、実践的な生活者大衆の形成のために、即ち民主社会の存続と更新のために現実の社会で行動できる人間の形成が求められた。これにふさわしいカリキュラムが求められることになる。このような「民主化」の要求は必然的にカリキュラムの「生活化」の要求を導かずにはいない。実践的な生活者の形成には、何よりもまず生活を通して生活に準備するカリキュラム、いわゆる生活カリキュラムが必要となる。ここではカリキュラムの中心は従来のような教科中心ではなく、児童中心のカリキュラムへと移るデューイのいわゆる「カリキュラムのコペルニクス的回転」である。

以上のようなカリキュラムの「民主化」、「生活化」の要素は、カリキュラムの「総合化」、「活動化」、「個別化」の要求となってあらわれる。

従来の教科カリキュラムがあまりに多くの教科に分断され、さらに人為的な時間割に寸断され、児童は総合的経験をもつことができなかつた。カリキュラムの「総合化」とはこのような欠陥をなくすために、教科の枠にとらわれない、児童のための総合的なプロジェクト（単元学習）を用意しようとするものである。したがってこのような総合カリキュラムは必然的に児童の自発活動を促進し、「活動化」されたカリキュラムとなる。同時にこのようなカリキュラムは、一人一人の児童の個人差に注目し、できるだけ個人の興味と能力を生かす手段を講ずるであろう。たとえば自由研究の時間を設け、個別指導をするなどがそれである。

3. コア・カリキュラムの編成

以上のような性格をもつ生活カリキュラムは、具体的にどのように編成されるのであろうか。倉沢剛によればバージニア案やカリフォルニア案のように、一方の側に広い「生活領域」例えば①健康の保持、②家庭の建設、③公民の責任、④娯楽、⑤生計の維持、⑥生産、⑦教育、⑧保護保全、⑨芸術的欲求の表現、⑩宗教的欲求の表現などスコープ(Scope)を並べ、⁶⁾ もう一方の側に「児童の発達段階」シーケンス(Sequence)を並べこの2つの座標の上に児童が学ぶべき単元(学習単元)が設定される。この単元がコア、Core(中核)であり、中心学習であると述べている。⁷⁾

4. 生活カリキュラムと教科カリキュラムの関係

それでは生活カリキュラムと教科カリキュラムとは、どのような関係にあるのだろうか。梅根悟はその著『コア・カリキュラム—生活学校の教育設計—』(昭和24年)の中で次のように述べている。

「生活カリキュラムは全カリキュラムの中核でなければならないことを主張していますが、教科カリキュラムをなくしてしまおうということは少しも考えていないのです。生活カリキュラムを中心にすえることによって教科カリキュラムは、今までのような注入主義や暗記主義から脱し、もっと生き生きと本気になってそれに取り組むだろうと考えているのです。生活カリキュラムが中核にすえられていて、それと関連をもたせて教科カリキュラムが取扱われねばならないということです。」⁸⁾

すなわち、生活カリキュラムの中の「中心学習」が中核にすえられていて、それと密接な関連を保ちながら国語や算数のような「基礎学習」が配置されることが望ましいのである。

倉沢剛も全く同様の考え方で、その著『カリキュラム構成』の中で、「国語と算数のような技能は生活の用具である。元来が生活の手段である技能をあたかも目的であるかのように考え、生活から切り離して技能そのものを練るのは意味のないことである。近代学校ではこれを改め、むしろ実際的な生活の場を設定し、そこで技能の必要を痛感させ、それに促されて進んで練習するように導き、練習したことはまたすぐに生活の場にもどし、楽しく、はりあいをもって技能を学ばせようとするのである」⁹⁾と述べている。

5. コア・カリキュラムの具体案

(1) バージニアプラン

ここでは、倉沢剛によって紹介され、我が国のコア・カリキュラムに影響を及ぼしたアメリカのバージニアプランについて考察してみたい。

表1に示したものはアメリカのバージニアプランにおける一日のプログラム¹⁰⁾であるが、中心学習の次に「直後の技能練習」の時間が設定されている。梅根悟、倉沢剛両氏の述べている以上のような原則はこれらを参考にしたものであろう。

(2) 倉沢プラン

表2に示したものは、倉沢剛が試案として出した日課表¹¹⁾である。まず「中心学習」があり、その直後に「技能の練習」がある。この意味はさきに述べた倉沢の主張に明かである。この試案にはもう一つ「技能の発達」の時間がある。これはさまざまな技能を系統的に学ばせる時間であり、必ずしも中心学習とは関連せず、反復学習などをさせる時間があってもよいとしている。

6. コア・カリキュラムの全体構造と実践

(1) 「明石プラン」の全体構造—兵庫師範学校女子部附属小学校単元表をもとに—

我が国におけるコア・カリキュラムの実践では、いくつかのプランが開発され、展開された。たとえば有名なプランをあげてみれば、東京高等師範学校附属小学校の「東京高師プラン」、奈良師範女子部附属小学校の「奈良吉城プラン」、新潟第一師範男子部附属小学校の「新潟プラン」、和歌山師範男子部附属小学校の「和歌山プラン」、東京港区桜田小学校の「桜田プラン」、兵庫師範学校女子部附属小学校の「明石プラン」などである。

ここでは兵庫師範学校女子部附属小学校の「明石プラン」をもとに考察・吟味してみたい。

表3に示したものは、我が国におけるコア・カリキュラムの具体案として最も有名な兵庫師範学校女子部附属小学校の単元表である。¹²⁾

この表の左上をみると、まず「範囲」とあって、「消費」、「生産」、「通信運輸」、「保健」、「保全」、「統制」、

「教育」、「厚生慰安」、「宗教及び芸術」、「交際」の10項目を掲げ、児童がこの民主社会の中で経験すべき「生活領域」あるいは「社会機能」を縦軸に並べている。従来の教科カリキュラムでいえば、学習されるべき教科名に相当するものである。これに対し横軸には「系列」とあり、「社会機能」を学ぶべき「児童の発達段階」を並べている。これは具体的には「学年」、「強調すべき生活の領域」、「興味の中心」、「社会性の発達」、「地理的意識の発達」、「歴史的意識の発達」、「学習能力」とあり、自然と社会に対する自動の座標の上に設定されている。たとえば1年生ならば最初に「学校めぐりをしよう」というようにである。このモデルは、アメリカのバージニアプランやカリフォルニアプランかもしれないが、このプランは日本社会の実績を十分に踏まえて具体化されたものと評価されてよい。

(2) 明石プランの教育細案

表4に示したものは、以上述べた明石プランの第4学年を対象とした「教育細案」である。¹³⁾

この細案をみれば、明石プランには「中心学習」と「基礎学習」の項目があり、今までの長いコア・カリキュラム論争を乗り越えた実に精細なプランであることが明らかである。

「中心学習」は「児童の活動」とあり、これは前述した全体の単元表の「範囲」(Scope)が背景にあり、ここから導き出されたものである。これに対し「基礎学習」は、その内容として「情操」(さらにこの中が文学、音楽、美術と分かれている)と「技能」(さらにこの中が言語、数量、その他と分かれている)と「健康」に分かれており、そこでは学習項目は、「中心学習」と密接に関連するものとして設定されており、全体単元表という「系列」(Sequence)が十分に生かされているといえよう。

7. おわりに

現在の教育改革の推進は、まさに教育課程の開発、カリキュラムマネジメントの成否に大きく左右されている。

これまでの歴史的展開においても明確なように、カリキュラムの自主編成は周到なプランの存在の中で教育上大きな成果をあげてきた。ここでは当然のことながら子どもの成長や発達に責任を持って関わる学校教師が、最優先に子どもの現状、地域に目を向け、将来を展望し、各学校の特色を十分に発揮し、主体的にカリキュラム開発を行ったといえる。

現代において教育課程はますます複雑化する傾向にあり、その中で教育課程基準の大綱化や弾力化が進行しており、まさに教育課程の編成の役割を担う学校、教師にとっては十分に能力を発揮しなければならない。

ここではカリキュラムのコンセプトが開発と評価といったような広い領域として捉えられなければならない。さらに、現代のカリキュラム開発においてもコア・カリキュラムが重要な視点として掲げた子どもの成長発達の視点と、社会への対応といった要素を十分踏まえてカリキュラムの内容及び方法を吟味していく必要がある。

当時コア・カリキュラムもさまざまな課題を残したが、その問題点も十分に考察しながら現代におけるカリキュラム開発を推進していくことが重要であると思われる。

表 1

日課案と教育計画表

バージニア案における一日のプログラム

学 習	内 容
開始の時間	挨拶と打合
中心学習	社会的な問題を解決する計画と学習の分ち合い
健康と体育	休息と遊戯とスポーツ
中心学習	社会的な問題を解決する計画と学習の分ち合い
直後の技能練習	中心学習で必要を感じた技能をすぐその後で練習する
昼食の時間	昼食時のプログラム
心情の時間	人間的な愛情を育む創作活動(鑑賞と表現)
健康と体育	休息と遊戯とスポーツ
技能の発達	系統的な技能の反復練習
自由研究	個人の問題を解決する

(註) 時間は学校の事情により学年によって修正される。
これは小学校高学年のおよその基準を示したにすぎない。

表 2

日課案の試案

学 習	月	火	水	木	金
打ち合わせの時間	〃	〃	〃	〃	〃
中心学習	生活単元	生活単元	生活単元	生活単元	生活単元
休息と運動					
中心学習	生活単元	生活単元	生活単元	生活単元	生活単元
技能の練習					
昼食の時間					
情操の時間	音 楽	美 術	文 学	音 楽	美 術
技能の時間	国 語	算 数	家 庭	国 語	算 数
健康体育					
個人の興味の時間					

表 3

明石附小プラン単元表

兵庫師範学校女子部附属小学校

系 列 範 囲		身近な環境での生活		広まり行く環境での生活		私たちの縣と國での生活		
		学年	I	II	III	IV	V	VI
		強調すべき生活の領域	家庭と学校	私たち町	明石	明石とその周辺	兵庫県とその周辺	日本と世界
		興味の中心	家庭を中心とする郷土社会の生活		自然環境と人間の生活		文化の発達と人間と生活	
		社会性の発達	社会生活は著明ではない		社会性がやや著しくなる		社会集団生活が拡大し、社会関係その義務について理解する	
		地理的意識の発達	いまだ地理的意識はあられない		郷土を中心として広まり行く地域を地理的に考察する力があられ始める		郷土を媒介として他の地域を地理的に考察する力が深まる	
		歴史的意識の発達	過去と現在の区別がつかない現実と想像の区別がつかない未分化である		身近な事柄について歴史絵的背景を考える力が芽生える		日本及世界の事柄について、歴史的考察する力がついておる未来が分化する	
		学習能力	情緒的性質が著しい行動的性質が著しい自己中心的傾向が著しい		情緒的、行動的傾向はなお著しい自己中心的傾向をはなれ始める		行動により具体的に考える自己中心的傾向を脱する	
社会機能	具体的教育目標							
消 費	○都市生活に於ける大きな困難であるインフレの現状を理解すると共に貯蓄に対する正しい態度を養う	1 学校めぐりをしよう	2 二年生の用意をしよう	1 たのしい三年生のくらしをしよう	1 私たちのくらし方を工夫しよう	1 水道施設の模型をつくろう	1 私達の手で楽しい学校にしよう	
	○諸費生活を合理化するの共同組合組織を理解しこれに協力する態度を養う	2 舞子公園へ遠足しよう	2 学園を花で飾ろう	2 美しい庭園を作ろう	2 明石公園のパノラマを作ろう	2 水産加工品を作ろう	2 学校工場を作ろう	
	○生活を合理的に営んで経済生活の安定をはかる能力を養う	3 めだかすくいしよう	3 八百屋ごっこをしよう	3 明石のまちなみをつくろう	3 家をたてて楽しい生活をしよう	3 海水浴やハイキングをしよう	明石市の復興に協力しよう	
	○納税の正しい社会的意義を理解して、分に應じて之に積極的に協力する態度を養う	(以下省略)						
	○金銭、物品を正しく使用する態度を養う							
	○戦災都市に於ける不自由な衣食住の生活を合理的に処理する態度と能力を養う							
○経済生活に於ける統制の意義を理解して社会の秩序を維持する態度を養う								
生 産	○消費の機能を果たす社会の施設(各種消費組合、商店街、配給公園)を理解する	(以下省略)						
	○水道の設備の現状を理解し、将来の改善策を工夫する能力を養う							
	○現実の困難を打開する道は一に各種生産を増進し貿易を盛にするにある事を理解する							
	○米、石炭、肥料、電力がすべての生産の基礎をなすことを理解する							
	○勤労の信義を理解し積極的に生産に参與する態度と能力を養う							
	○生産の過程と分業の組織を理解し社会の秩序を維持する態度を養う							
○日本の現状と明石の地域性密み生産加工の重要性を理解する	(以下省略)							
○発明発見、機械生産が産業を飛躍的に向上させるものであることを理解する								
○人間は各々の職業を通じて社会に貢献するものであることを理解する								
○生産の機能を果たす社会の施設(工場、加工場、試験場)等を理解する								

表4

単元	私たちのくらし方を工夫しよう		月別配当	自 四月第一週 至 五月第一週	学年	四学年
目標	○四年生になった喜びを自覚して、四学年にふさわしい自主的積極的な生活態度を養う ○日常身のまわりの物ごとを主体的・計画的に処理して行く態度と能力を養う ○自他の人格を尊重して、協同して共同研究する態度を養う ○積極的に健康を増進して行く知識と能力を養う ○時間に対する関心を高め、生活を計画的に進めて行く知識と能力と習慣・態度を養う ○学級役員を中心として、各人が自分の分を自覚し、應分の努力を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う					
中心学習	基礎学習					
児童の活動	文学	音楽	美術	言語	数量	その他
○四年生になった喜びと将来の話し合いをする ・三年生の反省 ・四年生になった喜びを話し合う ・三年生の健康の反省と本年の目標 ○生活時間のわり振りを工夫する ・生活時間の合理化について話し合う ・学習、遊び、睡眠時間の調節 ○学習の計画を立てる工夫する ・学校での勉強の仕方を工夫する ・家庭での勉強の仕方を工夫する ・社会のいろいろな場所に行つて勉強する	●教科書 「校門のかしの木」を しらべる	・歌曲「春」「かすみか雲か」 をうたう・打楽器で伴奏をする	●「校門」 写真画	・庭、言、歌、波、黄、率の字を習う	○計算力の反省をして計算練習の計画をたてる ○一日の生活時間を円グラフにする	●時間計算 ●生活時間を吟味するうちに 1-3 1-2 1-4 を理解する
	○批評する点をはつきり話し合う	●学習時間を継続的に記録する ●学習時間をグラフに表す	○書物との距離三〇〇〇 照度二〇〇〇 一五〇ルクス ○照度の実験をする	●身体測定の方 ○姿勢と健康関係 ○不良姿勢の矯正	○四年生としての自覚を持たせる ○なごやかな雰囲気のうち話し合いが進められるようにする ○友達の発表をよく聞く態度 ○物ごとを計画的に進められるようにする ○正確な時間観念を持たせる ○実行出来るような計画をたてる	○一度立てた計画は着実に実行する ○自発的に勉強が出来るような雰囲気をつくる ○練習がより楽しく共同的に進められるよう
	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う
	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う
	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う
○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う
○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う
○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う	○生活態度を重ね、よりよき学級を建設して行く態度と能力を養う

明石附小プランの教育細案（教育計画表）
第四学年

註

- 1) 天野正輝 (2000) 「総合的学習のカリキュラム創造にむけた課題」

日本教育方法学会編『総合的学習と教科の基礎・基本』所収 図書文化 P.13

- 2) 当時の教育現場の状況を明石プランで有名な明石女子師範附属小学校

清水一郎氏は次のように回想している。

経験カリキュラムに対する理解はもとより、カリキュラム構成の技術については零に等しい教育実業界、何を対象とし、何を範囲とするかはっきりしない一教材としての社会科を前にして、すべての教育実家は右往左往せざるを得なかったのである。

わからないままに、然しなんとかしなければならぬ現場のわれわれは、社会科をめぐるさまざまな問題解決にむかって努力した。そのうち社会科の学習活動と他教科との重複に不満を感じたり、形式的に一教材としておかれている位置に疑問をいだくようになってきた。

社会科を指導要領の線にそって真面目に実施しようとすればする程、時間的にも不足を覚えるし、内容的にも、もっとすっきりと筋の通ったものに仕上げていく必要を実際上感ぜざるを得なくなってくる。ちょうどこの頃、我が国の社会科が範にとったといわれるアメリカのそれがアメリカに於けるカリキュラムの全体計画のどこに位置しているかという事が明らかになってきた。

すなわち、ヴァージニアや、カリフォルニアに於ては単なる一教科ではなく、コア・カリキュラムであって、小学校に於ては教科の別を越え、生活の問題解決を中心として問題解決に必要な限りあらゆる知識や材料を最大限に活用していく中心学習として全体計画をひきしめる母体の役割を果たしていることが、だんだんと明らかにされるようになってきたのである。

このような生活のコースを多教科並列中の一教科として取扱うこと、ここに矛盾と困難の原因がある。そう分つてくるとカリキュラム研究に主力を注がざるを得ない気持ちになった。

(清水一郎「カリキュラム改造を目ざして私の歩んだ途」『カリキュラム』1949年11月より)

- 3) 教師養成研究会 (1951) 『教育課程カリキュラムの構成と展開』学芸図書 P.P.92-94

- 4) 倉沢剛『カリキュラム構成』誠文堂新光社

1949

- 5) 前同書 P.80

- 6) 倉沢剛著『米国カリキュラム研究』風間書房

(1985)によると、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820 ~ 1903 年) によれば、教育の目的は「完全な生活への準備」であり、そこで人間の生活機能を次のような5分野に分類したことが紹介されている。

第1. 直接に自己保存に役立つ諸活動—保健・保全

第2. 生活必需物資の獲得によって間接に自己保存に役立つ諸活動—生産・分配・消費・交流通信

第3. 子孫の養育としつけをめざす諸活動—養育・教育

第4. 適正な社会的・政治的な関係を保つに必要な諸活動—交際・政治

第5. 趣味や情操の満足をめざして、生活の余暇をたのしむさまざまな活動—娯楽

- 7) 倉沢剛 (1949) 『カリキュラム構成』誠文堂新光社 P85.

- 8) 梅根悟 (1949) 『コア・カリキュラム—生活学校の教育設計—』 光文社 P.P.220～221
- 9) 倉沢剛 (1949) 『カリキュラム構成』 誠文堂新光社 P.239
- 10) 前同書 P.347
- 11) 前同書 P.353
- 12) 前同書 P.358
- 13) 前同書 P.359